

金研物語

先達との
出逢い

きんけんものがたり

中国との学術交流 3

日中国交回復後、初めて金研に学んだ留学生たち

京都大学名誉教授 (1964-85 金研に勤務)

小岩 昌宏

日中国交回復後はじめて金研に長期滞在した中国からの研究者は以下の3人の方である。

刘 茂林(北京有色金属研究総院)

和泉研究室(非鉄合金研究部門)

孫 本栄(鉄鋼研究院)

田中研究室(金属加工研究部門)

王 文魁(中国科学院物理研究所)

岩崎研究室(回折結晶学研究部門)

この3人は中国政府派遣留学生として、1979年4月に来日し2年間滞在した。刘茂林さんは和泉研究室で、Cu-Nb-Sn複合材料の超伝導特性、孫本栄さんは田中研究室でNbマイクロロイニングした鋼板、王文魁さんは岩崎研究室で高压下の非晶質の変態に関する研究を行った。(王さんは2年間の滞日の後、一旦帰国したが、その後学振招聘研究員として再度来日し、東北大学より理学博士の学位を授与された。現在も物理研究所の教授として活躍されている様子である。)

写真1は来日丸1年たったときの懇親会、写真2は1981年4月の帰国直前に金研で開催された送別会のときのものである。これら3人の留学生の受け入れ状況が『日中友

好雑記』(佐々木信男著、2002年8月、私家版)に記されている。(該当部分のコピーをお送りいただいた篠原 猛氏に感謝する)。関連部分の概要を以下に記す。

1979年、中国政府派遣留学生が数名東北大学へ到着するという情報が入り、宮城県日中友好協会などが受け入れ準備を進めた。4月11日に第一陣の2名が、26日には孫本栄、王文魁、刘茂林ほか2名が来仙した。3人は原ノ町のxxさんが持っている空き家に落ち着いた。テレビ、冷蔵庫、机、椅子などの日用品は(友好協会)会員の寄贈によりそろえることができた。留学生諸君の話では、大使館から一日の食費は千円ぐらいで生活すると言われていたとのこと。食費月3万円ではちょっと無理なような気もするが、留学生諸君は夜に自炊するので大丈夫といていた。また家賃は一人1ヶ月2万円ぐらいは保証され、その他生活、勉強に必要なものは中国政府が出してくれるが、---。来仙した留学生の全ては東北大学の研究所で勉強する研究生で、研究はその性質上、夜遅くまでかかることが多い。しかし、仙台の交通機関は午後十時半頃までしか運行されておらず、留学生諸

君はタクシーに乗るだけのお金の余裕はない。xxさんらのご好意で一応落ち着いた宿舍は、研究所から離れたところにあり、通勤に不便を感じているようであった。留学生諸君に研究所近くによいところが見つかったら移転するように話したが、彼らは非常に律儀で、xxさんらに悪いのではないかという。私たちは、xxさんらも日中友好協会の会員で、皆が十分に研究できることを願っており、そんな心配をする必要はないと説得し、3人は霊屋橋近くのアパートに移ることになった。

なお、上記の3名の来日から1年後の1980年4月に、瀋陽から下記の研究者が加わった。

李 鍾浩(中国科学院金属研究所)(瀋陽) 武藤研究室(低温物理学研究部門)

研究テーマ:「シェブレル相化合物における上部臨界磁場の異方性」

李 鍾浩さんの滞在予定は1年間であったが、延長して2年滞在されたそうである。同氏の写真3は、小林典男教授に提供していただいたものである。



写真1.中国留学生と受け入れ研究室教官の懇親会。(昭和55年4月、仙台中央市場東山にて)
前列左から
和泉 修、田中 英八郎、
岩崎 博、志村 宗昭。
後列左から
孫 本栄、王 文魁、
井野 正三、池田 圭介、
永田 明彦、刘 茂林
(永田 明彦氏提供)



写真2. 送別会で感謝の言葉を述べる留学生。
左から孫 本栄、王 文魁、刘 茂林の各氏
(昭和56年4月 金研講堂にて。永田 明彦氏提供)



写真3: 李 鍾浩氏
(小林 典男氏提供)